

寄稿 朝井リョウ

直木賞に選ばれて――

会見会場を出て歩む線路は

私は、受賞会見のとき、消えた。

たくさんの人に囲まれながら、『何者』という小説の中で書いたある一節を思い出していた。

「生きていくことって、きつと、自分の線路を見てくれる人数が変わっていくことだと思うの」

質問への回答を考えながらも、この一文が、頭の中で何度も浮かんで

昔は、いつもそばに家族がいた。家族が、私と

全く同じ目線で、私の人生の線路を見つめてくれていた。学校に行けば、

同じ町に住む友人や先生がいた。親身になって、いっしょに進学先を考え

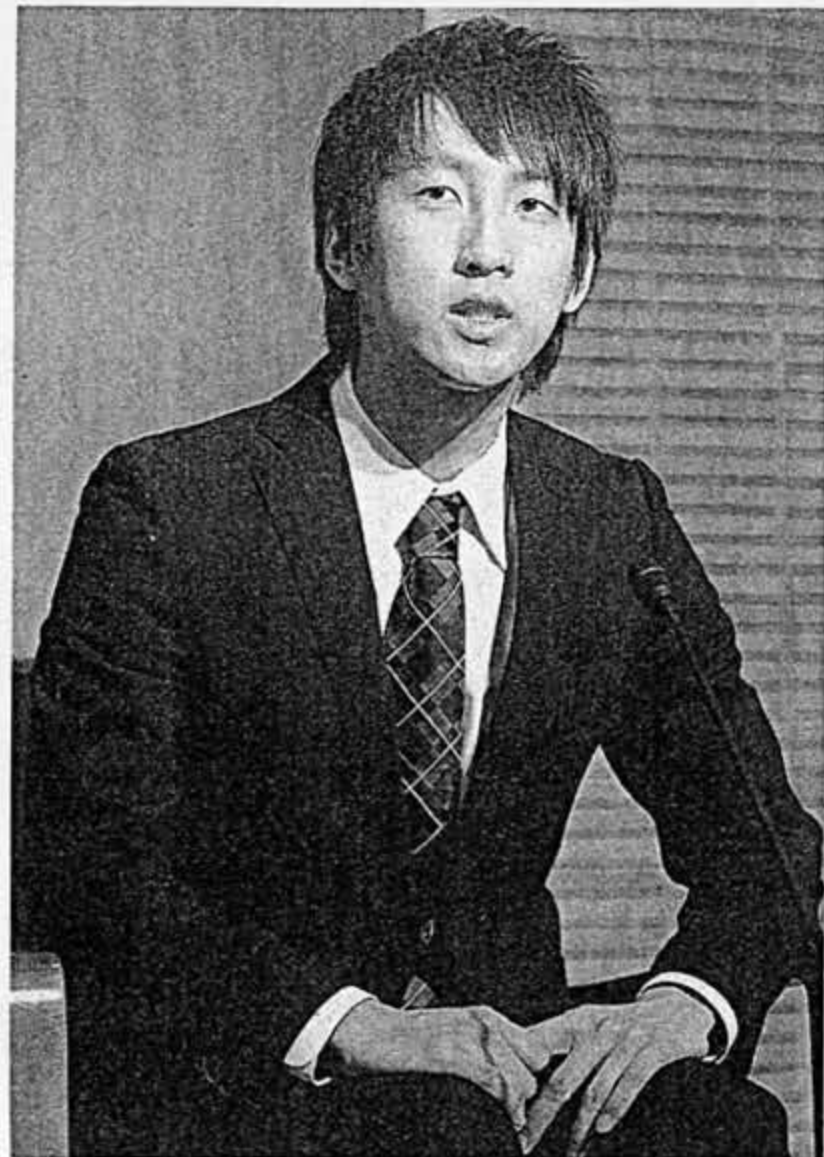
てくれた。だけどやがてその人数は減っていく。自分の人生の線路を全く

同じように見つめてくれる人はいなくなり、「結果より過程が大事だ」と

いう言葉が通じなくなっていく。そして最終的には、自分の家族ができ、

自分が見つめる線路の数が変わっていくのだから。

たくさんフラッシュを浴びながらいま私は、たったひとりで線路の上



直木賞受賞が決まり、記者会見に臨んだ朝井リョウさん＝手塚耕一郎撮影

に立っているのだと感じた。誰もいない線路に立ち尽くしたまま、ぼんやりと、ある少女の後ろ姿を思い出していた。

私が通っていた高校は、進学校だった。生徒全員の目の前には、大学に進学し、やがて就職するという大雑把な線路があった。

そんな中、ある日、ひとりの女子生徒が高校をやめた。夢を追いかけたから、という理由で、小テストや模試で埋め尽くされてきた線路の方向を、彼女は変えた。

すごいね、がんばってね、応援してるよ。前向きな言葉が彼女の線路へと投げ込まれた。私も、何と言ったかは覚えていないが、きつと、投げ込んだ。彼女は投げ込まれた。彼女が投げ込まれた。彼女が投げ込まれた。彼女が投げ込まれた。

私はたまたま、彼女のブログを読んでいた。次の小テストのために古典単語を覚えながら、なかなか

か来ない四両編成の電車を待ちながら、掃除の時間に適当にホウキを動かしながら。だけどいつしか、私は私の線路を見つめることで精いっぱいになっていた。

あるとき、久しぶりに、彼女のブログにアクセスしてみた。もう、そのアドレスにページは残って

いなかった。私は、本当は、あの埃っぽい昇降口を出ていく彼女の後ろ姿を見た

そのときに、勝手に彼女の線路を終わらせていたのだと思う。がんばって

ね、とは、確かに言った。がんばってほしいという気持ちに嘘はなかった。

だけど、そんな私でさえも、彼女のブログが無くなっていくことに、しばらくしてから気がついたのだ。私は、「夢を追いかけて高校をやめた唯一の人」という、考えうる

限り最もきれいなピリオドの打ち方で、勝手に彼女の線路のその先をぶった切っていたのだ。

きつと、私の直木賞受

賞会見は、彼女のあの後ろ姿と一緒だ。あの場面だけが、世界で一番うつろいやすい写真のように、周囲の人の記憶には残っていくのだから。たくさんカメラ、たくさん

者。一瞬、私の人生は多くのフラッシュに照らされた。一瞬、たくさん人が私の人生の線路をいっしょに見つめてくれた。だけど私はあの会見

会場から出ていかなければならない。いつまでも、そのうつくしい写真の中にはいられないのだ。

私は数年遅れで、彼女の背中に追いついた。もう誰も、私の進む線路を、いっしょに見つめてはくれない。ここからはひとり

りで進むしかない。いつかまた、たくさんの人が待っていてくれる大きな駅に停車するまでは、この線路をたったひとりで

進んでいくしかないのだ。

(あさい・りょう)作家、『何者』で第148回直木賞)